

MG アカデミックリテラシー研究1

「情緒作文」を捨て、論理的な説得の世界へ

日本の高校までの一般的な作文教育と、大学で求められる「書く技法」の決定的な違いとは何でしょうか。自分の体験による「素直」な感想をのべ、「〇〇すべきです」と主観的に言い立ててほめられることは、大学ではありえません。必要なのは、客観的な根拠にもとづいて「だれが考えてもこうならざるを得ない」と主張する、論理的な文章です。そのためには、他者の主張を批判的に検証する「読む技法」を身につけることも欠かせません。レポートや論文に求められる学問的な「読み書きの技法」、すなわちアカデミックリテラシーを早期に修得し、能動的な知の世界の入口をくぐりましょう。身につけた技法は大学生生活のみならず、広く社会生活を根幹で支える力となるはずです。

●科目のあらまし

「アカデミックリテラシー研究1」は、大学での日本語によるレポートや論文の執筆に必要な基本的技術を身につけるための、一年生向け、一学期完結の少人数・演習型コースです。この授業の特色は、論理的な文章を書くさいに必要な具体的スキル——問いをどのように立てるか、資料をどのように検索するか、ひとから借りたことばやアイデアを自分のものとどのように区別するか、段落をどのように構成するか、どのように推敲して無駄のない文章にするか——を体験的に学べることです。指導の中心は、ほぼ毎週宿題に出されるレポートの執筆と、教員による添削指導です。

こうしたスキルを一年次に学ぶことにより、レポートがかなりラクに書けるようになり、大学の講義の理解も格段に深まるでしょう。しかしそれだけではありません。論文執筆で体験する思考のプロセスは、見つけにくい問題の発見に役立ち、まちがった推論を取りのぞき、あなたの主張を説得力あるものにします。このためレポートを書く技術は、日常生活のさまざまな場面にも活きるのです。とは言えスポーツや芸術の修練と同じように、書き方を学ぼうえでも、基本的な“型”すら身につけず、いきなり自分のやりたようにやるのは理にかないません。この授業では、全クラス共通の配付資料にもとづき、履修者のすべてが同じ課題にとりくみ、基本的な“型”に即したレポートを書きます（2017年度は「死刑存廃問題」をテーマとしました）。自分なりのテーマを書きたいように書くのは、その先のことです。

この科目の履修者はほぼ例外なく、一年目でもっとも苦勞の大きな授業であると感じるはず。一度欠席すると、追いつくのもかなり大変です。過去の履修者も相当の覚悟をもって登録したはずですが、残念ながらおよそ2割が単位取得にいたりません。ひとに読ませるに値する文章を一学期間書き続ける、ねばりづよい意志が欠かせません。ただしそうした意志さえあれば、履修者一人ひとりが別次元の書き手に成長します。独自の教科書を用い、定員15名ほどの



クラスで、明快かつ丁寧な指導をします。

●授業のゴール

学問的な文章を書くうえでもっとも重要なのは、はっきりした問いを立てたうえで、「論拠」を示しながらその答えを出すことです。この問い、論拠、答えの三点セットを、「論証Argumentation」と呼び、その有無が論文とただの随想や読書ノートとの決定的な違いです。この科目ではとくに、刊行された資料や調査データを根拠として、何らかのアイデアを論証する技術を学びます。

とくに重視する基礎的なスキルはつぎの4つです。

- 1 簡潔な主張をもつ段落を単位として論文を構成する方法 (paragraph writing)
- 2 先行する資料を公正かつ効果的に示す、典拠資料の表示や引用など「帰責attribution」の作法
- 3 自分の文章を批判的に手直しし、無駄なく読みやすい表現にする推敲の方法
- 4 さまざまなデータベースをもちいた資料検索の方法

これらのうちより本質的であるとともに、多くの受講者が苦しむのが「1」と「2」です。「1」のパラグラフ・ライティングは、日本ではまだ一般化していませんが、英語圏では論文書法の基本とされ、初心者にただちに役立つ論理構成のスキルです。「2」の引用や典拠表示の作法は、他人の表現やアイデアを公正に示すための約束ごとです。このルールを身につけずにレポートを書くと、他人の文章を自分の名前で発表したり（剽窃）、他人が言っていないことを言ったかのように示したり（捏造）することになり、不正行為として処分の対象ともされます。しばしば文章の上手下手ではすまされない、人間性の問題とみなされるため、厳しく指導します。

こうしたスキルの定着に特化した独自教科書『アカデミックリテラシー・ハンドブック』を用い、論述の形式（どのように論じるか）に関するかぎり、この科目の履修後、大学卒業者（学士）として最低限恥ずかしくないレベルに達することを目指します。

●レポート課題



こうした技術を体験的に身につけるため、受講後4日ほどでレポートを1本提出し、翌週の授業で担当教員の添削を受け取ります。このうち作業量が多いレポートを学期中盤に1～2回（1,600字程度）、期末に1回（4,000字程度）課します。成績評価上の比重も大きいこれらのレポートの執筆中には、個別面談を受けます。また学期中盤のレポートでは、担当教員による添削を受けたうえで再提出する機会がありま

す。再提出のさい自分の文章を批判的に読みなおすことにより、叙述や論理構成の欠陥や基本的なスキルの不足に気づき、ひとりで推敲する力が身につきます。これら以外の提出物は、平常点の範囲で評価します。

●教室での活動

レポートを書く学生の多くが、どのように課題に答えるか以上に悩むのが、まず何を問うかです。この授業では、ペアやグループでのディスカッションなどの協同作業のなかで資料を消化し、背景情報を整理することにより、問いの立て方を学べるよう設計されています。学期のテーマにつき、それぞれ4～5回ほどを、こうしたグループワーク主体の対話型授業とします。教室での活動をとおし、論理的なコミュニケーション能力を育てることも、この授業の重要な目的のひとつです。また段落構成法や引用作法などのスキルについては、教科書をもちいた講義で説明します。一学期15回の授業の構成については、シラバスをご覧ください。



●履修手続き

「アカデミックリテラシー研究1」は、例年希望者が定員を大きく上回るため、「共通科目ガイダンス」当日に事前申込みのうえ、抽選により履修者を決定しています（事前申込みでは、希望する曜時限をふたつまで指定できます）。**ガイダンス当日は時間割を持参するなどして、学科の必修科目と重複しない曜時限を完全に把握しておいてください。**「アカデミックリテラシー研究1」では、いったん履修登録した学生の自己都合による取り消しは認めません。「とりあえず抽選だけ申し込んでみる」「一度授業に出てから考える」というやり方は、制度として許されていないだけでなく、切実に履修を希望しながら抽選に漏れた学生に大きな不利益をもたらします。また履修中に課題提出をあきらめたばあい、成績証明書には「D」と明記されます。授業の内容としくみをよく理解してから申し込んでください。